



Title	寺村秀夫の日本語文法研究への誘い
Author(s)	仁田, 義雄
Citation	阪大日本語研究. 1991, 3, p. 11-23
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/7272
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

寺村秀夫の日本語文法研究への誘い

An Invitation to Teramura Hideo's Syntactic Studies of Japanese

仁 田 義 雄

NITTA Yoshio

一われわれの寺村秀夫は、日本語の体系的な記述文法といった荒地を耕し、そこに美しい豊かな花を咲かせた偉大なる開拓者であった。一

1 寺村秀夫の目指したもの

まず、われわれの寺村秀夫が目指したものが、何であったのか、といったことから、話を始めていこう。

当時の清国からの留学生に日本語を教え、明治39(1906)年に、『漢訳日本語楷梯』といった留学生用の教科書を書いたこともある松下大三郎は、後年(昭和3(1928)年)、『改撰標準日本文法』の緒言の中で、自らの文法研究の契機を、次のように述べている。

私は少年の頃、当時最も世に行われて居つた中等教育日本文典落合・小中村両先生合著とスキントンの英文典の二書を読んで其の体系の優劣の甚しいのに驚いた。英文典は之を一読すれば和英辞典さへ有れば曲がりなりにも英文が作れる。然らば英米人に日本文典と英和辞典とを与へれば日本の文が作れるかといふと、そうは行かない。これは実に日本文典の不備からである。そう思つた私は僭越ながら日本文典の完成に任じようといふ志を立て、明治二十六年の夏瓢然として東都遊学の途に上つたのであつた。

われわれの寺村秀夫も、自らの書『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』の序

章の「はじめに」の箇所、この松下の言の前三分の二ほどの部分を、引用して、

本書の目的とするものも全くこれと同じで、その意味で本書の目標は
実用文法の作成である。(15p)

と、自らの日本語文法研究の目指しているものを述べている。ここからも、分かるように、寺村秀夫の目指したものは、体系的で実用的な日本語記述文法の完成にあった、と言えよう。

実用的であるということは、決して低級であるとか非理論的であるとかいったことを意味しはしない。いな、かえって、真に実用的であるということは、或は真に実用に耐えうるということは、逆に極めて体系的で理論的である、といったことを要請されるものなのである。

寺村の言う実用的である、ということは、日本語の形式(カタチ)と意味との結びつきが有している規則性を、完全にかつ明示的に呈示することであった。言い換えれば、日本語文のある形式を見た時に、それに適切な解釈を施し、逆に必要な状況において、それに叶う適切な文形を作り出せる、といった日本語を母語としている者が、自然と無意識のうちに身につけている日本語の言語運用能力を明るみに出す、といったことであった。われわれの寺村秀夫が敵に回したこの相手は、なまなかな相手ではなかった。なまなかな相手ではないどころか、完全に記述しつくすことは、不可能であろうと思われるくらい手ごわい相手である。われわれの寺村秀夫は、その手ごわい敵に向かって、果敢に、そして極めて新鮮な方法で攻め込んでいき、明解で豊かな成果を残したのである。

2 契機、その学的環境

次に、寺村秀夫の学問に影響を与え、それを特徴づけることになる研究の契機やその学的環境などといったものについて、三点ばかり触れることにしよう。

2.0 ものとして、私達が手にとって見ることのできる学説や成果は、研究者の学的精神・学的営みの結果・所産にほかならない。また、研究者

の学的精神・学的営みの形成には、研究者自身の個性、研究の契機、彼を包む学的環境などといったものが大きな影響を与えている。研究は、人とともにあり、時代とともにある。この事は、われわれの寺村秀夫の日本語文法研究にあっても、やはり、見てとることができよう。

2.1 まず第一に

寺村秀夫の研究生活にとって、大きな転機（或は実質的なスタートといったらよいのかもしれないもの）をもたらしたのは、大阪外国語大学留学生別科への奉職であった。1965（昭和40）年のことである。この留学生に日本語を教えるといった転機は、また、われわれの寺村秀夫の学的環境を形成し、彼の日本語文法研究全体に纏わりつき、彼の日本語文法研究全体を貫く大きな一本の糸を成している。ある意味では、寺村の学問は、留学生によって育てられたものである、と言ってもよいのかもしれない。事実、寺村は、

私の場合、これまでの文法研究をふりかえてみると、考えようとした問題は、外国人学生の質問がきっかけになったことが多い。

（「文法随筆その一「時間ガアリマセン」」『月刊日本語』1-1 p112）と述べている。外国人留学生が提出してくる問題は、素朴なものが多いだけ、逆に、極めて根底的な難解な問い掛けであることが、少なくない。その回答不能とも思えるような留学生達の質問に対して、われわれの寺村秀夫は、真摯に立ち向かって行ったと言えよう。その事が、寺村秀夫の日本語文法研究を、単に枠組みを呈示するだけのものに留どめず、日本語文法の複雑な現象の中に分け入って、われわれネイティブ・スピーカーには、当たり前であり、そういった問題があるといったことに気付きさえもしない問題の背後に潜む美しい法則性を、明るみに出す、といったきめの細かい実り豊かなものにしている、と言えよう。当たり前であると思える現象の解明は、さも問題がありそうな顔をしている現象の解明よりも、難しいことが少なくない。当たり前であるということは、その分、それだけ、我々の意識下に沈んでしまっていることであり、それを問題として捉えることからして、かなり意識を引き絞って当たらないと、不可能なことなので

ある。われわれの寺村秀夫は、そういった当たり前に思える日本語文法の現象の原野に分け入り、我々の前に、それが有している美しい法則性を、「なるほどなあ！」と思わずにはいられない説得力のある分析・記述方法で開陳してみせてくれた。

寺村秀夫は、我々に気付かれずに存在している極当たり前な現象を重視した。これは、学生の指導においてもそうであった。

留学生の質問といった契機があったにせよ、通常気付かれずにある極当たり前に思われる現象に対して、問題を発見し、その背後に潜む法則性を明るみに出す、といった営みは、寺村の鋭い言語感覚があって、初めて可能になったことなのである。われわれの寺村秀夫は、極めて優れた言語感覚の持ち主であった。この寺村の鋭い言語感覚は、次に触れる三上章に通じるような言語感覚でもあった。

2.2 その二として

われわれの寺村秀夫が、自らの日本文法研究の師と心に決める三上章と出会ったのは、大阪外大に奉職してから二年少し経った1967年の夏のことである。寺村が相談に乗っていた大阪の千里にある「関西研修センター」に、三上が講師として講義に出掛けた折りのことである¹⁾。三上と寺村との交遊は、1971年9月、寺村が、「青年の船」の乗船教官として、東南アジア等へ出発するために上京した東京で、三上の訃報に接するまでの四年間ほどの短いものであった。二人の交遊は、人と人との付き合いが、決して時間の長さだけの問題ではないことを物語っている。寺村は、三上と知り合って以来、終生、三上を自らの文法研究の師として敬愛していた。三上も、また、ハーバード大学に招かれたものの、すぐ帰国してしまうのであるが、その折り、「君が居てくれたらな。」と漏らすほど、寺村を頼りにしていた。人は人を知るといえるのか、三上と寺村の交遊は、肝胆相照らすといったものであった、と思われる。

三上は、自らの最初の著書『現代語法序説』（1953年刊）の後記の中で、

私の願いは現代語の実用的なシンタクス一冊を書くことである。(365p)
と、述べている。日本語文法研究に対する三上のこの目標は、既に述べた

ように、また、寺村秀夫の目指したものであった。われわれの寺村秀夫が、自ら、日本語文法研究の目標としたものが、実用的でかつ体系的な記述文法であったのは、彼の研究が、外国人留学生達に日本語を教え、実際に彼らに日本語の言語運用能力を身に付けさせなければならない、といった環境で、行われたといった事とともに、三上のこの姿勢への大いなる共感があったものと、思われる。

「コト」とか「ムード」とかいった三上の用語を使いながら、寺村も自らの文法記述を進めてはいるものの、寺村は、三上の直線的な継承者といったものではなかった。寺村は、もう少し深い所で三上と結び付いている。既成の枠にとらわれず、無数の生きた実例を凝視し、そこから、人が気付かなかったような日本語文法の特徴を、日本語だけにではなく、他の言語にも適応可能な一般化した形で解明してみせる、といった学営の基本的姿勢において、寺村は、三上に繋がり、三上を受け継いでいた。ただ、こういった学営の基本姿勢の継承は、誰にでも可能であるといったものではない。われわれの寺村秀夫の鋭い言語感覚をもってして、初めて可能であったのであろう。

われわれの寺村秀夫の日本語文法研究は、極めて体系的なものであった。また、優れて体系化を目指したものであった。寺村は、くろしお出版から出た三上の復刻版『続・現代語法序説』に、三上の著作の解題を書いて、

『序説』出現以来度々言われながら、一般の期待したような形での“体系的な”文法書は遂に書かなかったものの、～(242p)

と、述べている。寺村の目指した日本語記述文法の体系化は、三上がし残したものを受け取り、それを実現化・具現化することでもあった。その意味で、三上、寺村といった流れは、戦後の日本文法研究史の一つの偉大な流れを形成することになるものである。

われわれの寺村秀夫は、1990年2月3日12時18分、急性心不全のため逝去した。その寺村が書いた学術的な論文の最後が、1月27日付けの「ミカミ・アキラ伝」である。これは、依頼され、西ドイツから出版される世界の文法学者の略伝と学説の概要・その中核といったものを紹介する書物に

寄稿するためのものであった。寺村の死の一週間前のことである。このころは、持病の心臓病に加えて、既に腸閉塞がひそかに進んでいたものと思われる。その中で、寺村は、この「ミカミ・アキラ伝」を書き上げた。寺村と三上^{ミカミ}の縁の深さを思わずにはいられない。

2.3 その三として

先に、寺村秀夫の研究生生活の大きな転機、或は実質的なスタートを成したのが、大阪外国語大学への奉職にあった、といったことを述べた。これは、書かれたものとして、現れる論文を中心にしての言である。寺村の最初の公刊論文は1966年（外大奉職一年後）に現れる。しかし、この事は何も、われわれの寺村秀夫が、それ以前に言語学・英語学・日本語学の研究に勤しんでいなかったことを意味しはしない。寺村は、1961年から63年にかけて、アメリカ合衆国イーストウエストセンター奨学生として、ハワイ大学、ワシントン大学、ペンシルバニア大学に留学している。当時アメリカは、N. チョムスキー（Chomsky）が、オランダで1957年“Syntactic Structures（『統語構造』）”を出版し、最初の教え子で、かつ研究仲間でもあった R. B. リーズ（Lees）の“The Grammar of English Nominalizations（『英語名詞化の文法』-1960年刊）”が出て、まもない頃であった。変形生成文法が市民権を得る戦いを繰り広げていた最中であった。寺村は、そういったアメリカの言語学の変革期をその目で確かめて帰ってきた（後に、時折、寺村は、私に当時のアメリカの学会で展開されたアグレッシブな議論の様子を、語ったことがある）。

英語教育・言語学の研究のために、アメリカへ留学したものの、われわれの寺村がアメリカで学んだものは、単に展開しつつあった変形生成文法やB. ブロック（Bloch）などによる構造主義的日本語研究だけではなかった。彼は、アメリカの地で、山田孝雄の文法書などの、日本語文法についての伝統的な研究書を、せっせと読んでいたのである²⁾。

われわれの寺村秀夫は、日本語を研究の対象とする研究者である前に、まず英語を対象とする研究者であった。その事が、寺村の日本語文法研究に、視野の大きさや幅の広さを与えているとともに、彼を、海外での最新

の研究成果に造詣の深い日本語学者にしていた。

アメリカでの研鑽経験を持つ寺村が、変形生成文法の影響を受けなかったとは考えられない。事実、彼は、「生成文法の近年の動向—日本語研究の立場から—」(『日本語・日本文化』3号)といった論文を書いているし、「感情表現のシンタクス」(『月刊・言語』2巻2号)に、いわゆる“performative analysis (遂行分析)”の影響を感じ取ることは、さほど困難なことではないだろう。また、寺村が、単に存在している文法的な文のみではなく、存在しえない非文法的な文が、なぜおかしいのか、といったことを考えながら、文法法則を明るみに出していく、といったことや、寺村が学生へのメッセージとして、

～日本語は、～。欧米や、隣の韓国や中国の言葉とはどこが違っているのだろうか。違っているといっても、同じ人間の言葉なのだから、深いところでは共通する性質もあるのではないだろうか。そういうことを、主に文法の分野で考えつづけている。(『大阪大学文学部紹介』1989年度版, p29, 下線仁田)

と、自らの研究を語るのを見る時、深い所では生成文法の影響を受けていたことを知ることになる。

ただ、われわれの寺村秀夫は、決して海外で発展した理論や方法を、そのまま無批判に日本語に適応するといった学者ではなかった。いわゆる世にしばしば見られるところの、横のものを縦にするとといった学者などでは、決してなかった。学生に対しては、そういったことを厳として戒めていた。

寺村は、海外での最新の研究成果に熟知しながら、数多くの日本語の生きた実例を鋭い言語感覚で凝視し、そこから人が気付かなかった法則性を、普遍性の高い形で、明るみに出してみせることの可能な稀有な存在であった。

3 寺村秀夫の日本語文法研究の史的位置付け

次に、少しばかり、われわれの寺村秀夫の日本語文法研究を、史的展望の中において、眺めて見ることにする。

3.1 これまでの研究史の流れの中で

明治以来の日本語文法研究の流れを、極めて粗く、かつ、かなり独断的に瞥見すれば、次のようになる。

明治の極初期といえば、一方では、田中義廉^{たなかよしかど}の『小学日本文典』（1874（明治7）年刊）や中根淑^{なかねきよし}の『日本文典』（1876（明治9）年刊）などの、極素朴な、いわゆる洋式模倣文典が出たり、他方では、堀秀成^{ほりひでなり}の『^日本語学階梯』（1877（明治10）年刊）や佐藤誠実^{さとうじようじつ}の『語学指南』（1879（明治12）年刊）などの、いわゆる八衢学派の未だ行われていた時代であった。この洋式模倣文典と八衢学派の古い研究との折衷・統一を計ったのが大槻文彦である。彼の『広日本文典』（1897（明治30）年刊）がこれである。これは、彼が近代的な大規模な普通語辞書として、心血を注いで完成させた『言海（ことばのうみ）』の第一分冊の巻頭に付された「語法指南」を改訂増補したものである。そして、この大槻文法が基礎になり、それが、橋本進吉の橋本文法で改訂され、今の学校文法になっている。

しかし、明治以来の真に科学的な近代的日本語文法研究は、山田孝雄^{よしお}や、松下大三郎に始まる、と言ってよからう。山田孝雄の『日本文法論』が出版されたのは、1908（明治41）年のことである。一方、松下の『日本俗語文典』が出たのが、1901（明治34）年のことである。松下の研究は、後に既に触れた『改撰標準日本文法』へと成長していくことになる。

山田の研究の一つの中核が、文成立の根拠を問う「陳述論」といったものにあったことによって、山田以後の日本文法研究は、文成立の問題に多大の力を注ぐことになる。ここに、山田孝雄、時枝誠記^{もとぎ}、渡辺実と続く「日本文法学派」と言ってもよいような、日本文法研究史の一つのメイン・ストリートが出来ることになる。この流れの中に、「陳述論争」とでも名付けられる、日本では珍しい、一つの問題を巡っての多くの議論や研究が、戦前・戦後を通じて提出されることになる。

それに対して、松下の文法研究は、強靱な科学精神に支えられ、極めて体系的であり、アメリカ構造言語学の形態素論に匹敵するようなものをも、既に有している、といった優れて先駆的であったのにも拘わらず、それ以

後の日本語文法研究の流れの中心をなすことはなかった。中心をなすどころか、むしろ異端視されていたのではなかろうか。また、松下の研究の重要な問題に、「題目」の問題がある。有題文・無題文の区別である。

松下の題目の研究、「ハ」の研究は、佐久間^{かなえ}鼎に影響を与え、佐久間の「物語り文」「品定め文」といった提唱の、重要な一つの刺激をなす。佐久間のこういった研究は、三尾^{み おいさご}砂の「判断文」「現象文」の区別にも繋がっていく。

この佐久間を自らの文法の師として、日本語文の有している題述関係、「ハ」の働きを重視し、日本語には西洋語におけるような「主語」はない、といった主語廃止論を唱えたのが三上章であった。

山田が「ハ」の問題を扱わなかったわけではない。扱わなかったどころか、山田が本格的に文法研究に勤しむ契機になったのが、学生から受けた「ハ」に関する質問であったことは、つとに名高い。山田にあっては、「ハ」の問題は、松下や佐久間や三尾や三上と同じく、自らの研究の重要な部分を形成していた。ただ、山田のそれは、松下らと違って、文の類別に繋がっていくのではなく、文成立の根拠に関わる現象として捉えられていた、という点において異なっている。

佐久間や三尾や三上は、いずれも、生きた話し言葉を重視した。生きた実例を重視した。佐久間や三上らによって、文法カテゴリといったものが取り出されながら、日本語文法のシンタクス・文の内部構造論は、その内実を豊かにしていくことになる。この流れに、われわれの寺村秀夫は、繋がっていくことになる。文の内部構造論派・言語現象記述派と仮称できそうな、この流れは、既に述べた文成立論派とは違った意味で、明治以後の日本文法研究の重要な流れを形成することになる。

われわれの寺村秀夫は、この流れの重要な体现者として、鋭い言語感覚でもって、数多くの生きた実例を凝視し、そこから人が気付かなかったような日本語文法の現象を、数多く、他の言語にも適応可能な一般的な形で解明し、日本語記述文法の内実を、体系的に豊かにしていくことになる。

この流れを形成した学者に、当初は日本語プロパーでない者が多いこと

は、注目してよい。佐久間の本業は心理学であり、三尾は早稲田大学の哲学科で児童心理学を専攻した人間であり、三上は東大の工学部出身である。松下も、国学院に入学する前に、東京専門学校の英語学科に学んでいる。われわれの寺村も、京都大学法学部（旧制）へ進学する前に、大阪外事専門学校英米科を卒業している。

3.2 現在の状況の中で

次に、現在の日本語文法研究の状況の中における寺村秀夫の位置、といったものについて、極簡単に触れておこう。

一方には、文の根拠・文法の根拠を思弁的に問い掛ける山田に繋がる伝統的な文法研究があり、他方には、生成文法などの外からの理論に刺激された研究がある。われわれの寺村秀夫の研究は、それらのいずれにも目配りをしながらも、いずれにも偏することのない、文法現象のきめ細かい観察を重視した体系的な記述文法の完成を目指したものである（「目指している」ではなく、「目指した」と、過去形で言わなければならないことに、断腸の思いを感じる）。寺村と同様な体系的な記述文法を目指している他のグループに、「言語学研究会」の仕事がある。

このグループは、学校文法の不備を極めて鋭く指摘し、現代日本語について、形態論、連語論、文論にわたって、極めて質の高い研究成果を世に送り続けているグループである。ただ、私の目などには、いささか唯我独尊的にも映るグループでもある。この、質の高い研究を世に送り続けながらも、いささか唯我独尊的にも映るグループでさえ、好敵手・論敵として、しばしば言及せざるをえなかったのが、われわれの寺村秀夫の日本語文法研究である。

寺村の日本語学者としての令名を、一躍高からしめた論文に、「‘タ’の意味と機能—アスペクト・テンス・ムードの構文的位置づけ—」といった論文がある。これは、三上章に誘われてある人物の退官記念論文集に寄稿したものである（ちなみに、ここに掲載されている三上の「主格の優位」は、三上の絶筆である）。

寺村は、この論文で、「昼飯ヲ食ベタカ」といった“タ形”に対して、

「(モウ) 昼飯ヲ食ベタカ」といった問いに対するものとして、「イヤ、マダ{食ベテイナイ／食ベナイ}」と答えなければならない場合と、「(キノウ) 昼飯ヲ食ベタカ」といった問いに対するものとして、「イヤ食ベナカッタ」と答えなければならない場合の存することを、指摘している。この事実、否定すべからざる事実であり、寺村は、この現象の存在をもって、「タ」に、完了（アスペクト）を表す場合と、過去（テンス）を表す場合のあることを、示している。この寺村の指摘した事実は、「言語学研究会」のメンバーにとって、自らの立場とは異なる事実、何らかの形でかたをつけておかなければならない事実として、立ちはだかることになる。以後、このメンバーの多くが、寺村の挙げた事実と言及せざるをえないことになる。

5 寺村秀夫の日本語文法研究の体系と特色

最後に、寺村秀夫の日本語文法研究の体系と特色について、少しばかり触れておくことにしよう。

寺村の日本語文法研究は、『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』『Ⅱ』（くろしお出版刊）として結実することになる。単文編の最後の書になるその『Ⅲ』⁴⁾も、遺著として、一年以内に、くろしお出版から刊行されることになっている。『日本語のシンタクスと意味』は、単文編三冊、複文編二冊の計五冊として世に出るはずであった。しかし、複文編二冊は、寺村の逝去によって、ついに幻の書となってしまった（無念でならない）。寺村の論文の主要なものは、『寺村秀夫論文集上・下』とでも題して、これまた、いずれそう遠くないうちに、やはり、くろしお出版から刊行されることになっている。

寺村の、この『日本語のシンタクスと意味』は、内外の日本語文法研究者や日本語教育関係者のバイブル的存在であった。現代日本語文法に関する内外の論文・著書において、引用文献として引かれることの最も多い書物である。その『Ⅰ』については、既に韓国語訳がある。

寺村は、文法カテゴリを中心に、それらがどういった形態で表され、どういった統語的特徴を持ち、そしてどういった意味を表すのかを、細かく

考察している。さらに、それらの文法形式が使用される文法的条件・運用論（プラグマティクス）的條件にも考察を施している。寺村の文法研究は、形式・意味・運用論的使用条件の三位にわたる考察である。

『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』では、彼自身の品詞分類を含み、文の基本構成が概説され、コトの類型・ヴォイスの体系が詳しく述べられている。その『Ⅱ』では、活用の論が展開され、テンス・アスペクトや認識のムードが詳述されている。その『Ⅲ』では、「係りと結びのムード」として取り立て助詞が詳述され、『Ⅰ』で残された、構文を拡大していく連用的要素と連体的要素が、並列的結合をなすものと、主従的結合をなすものとに、分けられて述べられている。

最後に、われわれの寺村秀夫の鋭い言語感覚を示す例を一つだけ、サンプルとして挙げておこう。「ニチガイナイ」について、寺村は、

ニチガイナイの特徴は、自分の思案、推理を自分に確かめるような、
独自の使い方がふつうであるところにある。（『Ⅱ』 p236）

と、述べている。これは、「そうか、それなら来るかもしれないなあ。」とは、言えるが、「*そうか、それなら来るにちがいないなあ。」などとは、言えない、といった事を、頭に置いての言であろう。「カモシレナイ」とは異なった、「ニチガイナイ」の特徴である。言われてみれば、当たり前のことであるかもしれないが、なかなか気付かれにくいことである。「ニチガイナイ」について、このような事を言っているのは、私の知る限り寺村だけである。

やはり、われわれの寺村秀夫は、日本語の体系的な記述文法といった荒地を耕し、そこに美しい豊かな花を咲かせた偉大なる開拓者であった。

注

- 1) 三上章氏の妹茂子さんからの直話。
- 2) 寺村秀夫の葬儀での高校教師時代の友人の弔辞から。
- 3) 読み方は、佐藤喜代治編『国語学研究事典』の「古事類苑」の項目での読み方に従う。
- 4) 1991年2月3日にくろしお出版から刊行された。

付記 以上の文章は、1990年5月12日の『寺村秀夫先生を偲ぶ会』で、「寺村秀夫先生の学問」という題で話したものである。なるだけの対象化と真の意味での敬愛の情を込めるため、全編敬称なしで話した。

(文学部日本学科助教授)